

Title	書評 J. Petitot, F. J. Varela, B. Pachoud, J. Roy, (eds.): Naturalizing Phenomenology: Issues in Contemporary Phenomenology and Cognitive Science (Stanford University Press, 1999, xxi+640p.)
Author(s)	吳羽, 真
Citation	哲学論叢 (2007), 34: 118-121
Issue Date	2007
URL	http://hdl.handle.net/2433/70796
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

J. Petitot, F. J. Varela, B. Pachoud, J. Roy, (eds.): *Naturalizing Phenomenology: Issues in Contemporary Phenomenology and Cognitive Science* (Stanford University Press, 1999, xxi+640p.)

呉羽 真

フッサールの現象学を自然化し、現代の認知科学に導入することを目的とする本書は、現象学、認知科学の両分野にまたがる20人以上の編者、寄稿者たちの手に成る大部の論文集である。

「ギャップを越えて—現象学の自然化への序論」と題された編者たちによる第1章が、本書全体の序論をなす。そこでは、フッサールの現象学が、認知科学に、なぜ、そしてどのように導入されなければならないのかが論じられ、「現象学の自然化」というプロジェクト全体への見通しを与える。表題に含まれる「ギャップ」とは、認知メカニズムの観点から見られた心と、意識され、経験される限りでの心との間の「説明ギャップ」を指す。認知科学が、経験される限りでの心、すなわち「現象学的与件」を説明することに失敗している、という「説明ギャップ論」に一定の妥当性があることを筆者たちは認め、さらに彼らは、このギャップを埋めるために、現象学的与件を一

人称的に記述・分析する現象学に訴えることの必要性を説く。しかし、フッサールの現象学が反自然主義を標榜するものであったことを考慮すれば、現象学を認知科学に導入するに当たっては、現象学の根本的な刷新、すなわち「現象学の自然化」が行われねばならない。筆者たちは、こうした自然化の可能性を主張し、さらに自然化への様々な道を評価し、最後に本書全体の概要を述べる。自然化のために鍵となるのは、いかにして心的な諸性質を自然的な諸性質へと変換することができるか、という問題である。これに対して筆者たちは、現象学的与件という心的な存在者を、フッサール流の記述を介して、数学的に再構築し、自然科学の内へと統合しようとする。

本論に該当する諸論文は、三部に分かれる。まず、第1部「志向性、運動、時間」には、現象学の中心概念である「志向性」とその自然化について論じる諸論文、および志向性と関係の深い「運動」や「知覚」、「時間」についての事例研究に基づいた諸論文が収録されている。

第2部「現象学における数学」には、形式的・数学的モデルについて、および現象学と数学との関係について論じる諸論文が収められている。これらのテーマの重要性は、現象学的与件の形式化・数学化が、現象学の自然化にとっての鍵である、という編者たちの見解に根差している。

第3部「自然化の本性と諸限界」では、

より一般的かつ哲学的な観点から、現象学の自然化というプロジェクトの可能性が論じられる。ここには、現象学の自然化についての懐疑的態度を提示する諸論文や、認知科学と現象学との関係についての歴史的説明を行う諸論文も含まれる。

本書の全容を紹介するには紙数が足りないので、評者にとって特に興味深いと思われる研究が多く含まれる第1部から、幾つかの論文をピックアップし、解説したい。

現象学を認知科学のうちへ統合する近年のアプローチにおいて、特に注目を集めているのが、時間の研究である。本書でも、T. ヴァン・ゲルダーとF. ヴァレラがそれぞれ、フッサールの現象学的分析と、認知科学における力学的アプローチとの両者を用いて、時間意識の問題を扱っている。

ヴァン・ゲルダーは、第8章「木で出来た鉄？—フッサール現象学と認知科学の出会い」において、時間意識の謎に迫りながら、現象学と認知科学とがお互いに他方に対してどのような寄与をなしうるのかを明快に論じる。その謎とは、「あるメロディを聴くときに、このメロディの今プレイ中の部分しか存在しないのに、その過ぎ去った部分やまだプレイされていない部分について、そしてこのメロディ全体について、いかにして意識しうるのか」、というものである。まず、現象学と認知科学それぞれの時間意識の説明を見ていこう。一方で、フッサールの分析の要点は、意識が今を越え出

て行く仕方を、原印象、過去把持、未来予持から成る時間意識の三重構造によって説明する点にある。こうした説明によって、先に挙げた時間意識の謎に答えることができるであろう。他方で、認知科学は、聴覚パターンの再認のような事例を取り挙げ、時間意識の根底にあるメカニズムを研究している。こうした研究は、認知科学における計算主義的アプローチと力学的アプローチにそれぞれ対応した、二種類のモデルを用いて行われている。この内特に、力学的アプローチとは、認知を神経ネットワークのような力学系の中での相互依存的な進化、およびこのような進化における秩序や構造の創発とみなすものである。力学的モデルにおける聴覚パターンの再認は、刻々状態を変化させていく系が、状態空間の中でカーヴ状の軌跡を描き、再認領域に至る、という様で図式化される。さてそれでは、時間意識の問題において、現象学と認知科学は互いにどのように寄与しうるだろうか。フッサールの行った現象学的観察は、時間意識の説明において、認知科学における力学的アプローチが計算主義的アプローチに対して優位にあることを示唆する。計算主義のモデルでは、進行中のメロディの知覚が説明できない。これに比して力学的なモデルは、現象学が明らかにした経験の本性によりよく適合する。反対に認知科学は、フッサールの言う過去把持や未来予持が実際のところ何であるのかを教えてくれる。そのつどの系の状態は、聴覚パターンにつ

いての意識を模しており、この状態は過去と未来を現在の内に組み込んでいる、と解される。すなわち、系が今状態空間の内で占めている位置は、この系がこれまで描いてきた軌道によって規定されているとともに、この系がこれから描き出す軌道を方向づけているのである。

編者の一人であり、「オートポイエーシス」の概念や、現代の神経科学を現象学的方法論に結びつける「神経現象学」という立場の提唱者として著名なヴァレラもまた、第9章「見かけの現在—時間意識の神経現象学」の中で、現象学的説明と認知的科学的説明とが相互制約の関係にあるという見通しの下、現在—時間意識の説明の自然化を試みる。現象学的な時間の探求のためにはまず、物理的・計算論的な時間に、現象学的還元が施されねばならない。この手続きによって、線形のシーケンスとしてではなく、複合的なテクスチュアとして自らを呈示する、経験における時間が明るみに出される。W. ジェームズが「見かけの現在」と呼んだ現在—時間意識の基礎にあるこのテクスチュアを、ヴァレラは、現在・過去・未来の諸契機を内に含んだ「時間性の三分構造」と名づける。この構造に従って、客観は、持続を伴って経験される。ヴァレラは、力学的アプローチに従って、特定の細胞集成体 (assembly) が共時的カップリングにおいて創発するのに要する時間的スケールを、現在—時間意識の対応物として提示する。つまり、このカップリン

グが、持続の起源の基礎を成すのであり、フッサールの観取した、過去把持を通して現在が構成されるプロセスに対応する。ヴァレラはさらに過去把持と未来予持の非対称性に着目し、力学的な説明とフッサールの後期の着想を取り入れた新しい時間図式を提示するに至る。

ヴァレラと並んで「神経現象学」の提唱者の一人であるE・トンプソン、およびA・ノエ、L・ペッソアによる第5章「知覚的補完—現象学と認知科学における事例研究」では、認知科学の一分野である視覚科学で言われる「知覚的補完」という事例が取り上げられる。知覚的補完とは、何かが視覚空間の特定の領域内に現前しておらず、その周囲に現前しているときに、この何かがこの領域内に現前している、と主体が報告する事態である。盲点に対応する領域の周囲にある色や明るさによってこの領域が補完されている、というのが一例である。主体レベルで知覚的補完が起こっていることは争う余地がないが、それが起こる際、主体の報告を超えたレベルで、脳が欠如を埋め合わせるために失われた情報に代わる何かを生み出す「神経的書き込み (補填 filling-in)」が存在するの否かをめぐって、視覚科学では多くの議論がなされている。この問題に関しては、一方に、特定のニューロンの集合において神経活動と知覚の同型的対応が成立している、と考える「分析的同型説」の立場があり、他方に、神経的書き込みの存在を主張する立場が「デカル

ト的唯物論」という間違った意識概念に依拠しているとして、その存在を否定するデネットの立場がある。筆者たちは、分析的同型説を批判するとともに、デネットに対しては、神経的書き込みを分析的同型説およびデカルト的唯物論から切り離し、様々な経験的証拠を挙げて神経的書き込みの存在を擁護する。デネットは、知覚の記述において、パーソナルレベルとサブパーソナルレベルとの間の区別を軽視し、サブパーソナルレベルに位置する脳を、身体を備えたパーソンないし動物全体であるべき知覚経験の主体と取り違えるという誤りに陥っている。筆者たちはこの知覚的補完の問題を例にとって、パーソナルレベルの経験の現象学的研究を視覚科学に導入する必要性を訴える。

ここで挙げたほかに、本書には著名な現象学者による研究が含まれるので、その内の二つを簡単に紹介しておこう。

B. スミスは、J. J. ギブソンの生態学的環境についての理論を、全体と部分の関係に関するフッサールの形式的存在論(「メレオロジー」)によって補完し、判断の領域に拡張することを目指す(第2部第10章)。

現象学の重鎮 D. フェレスダールは、ゲーデルのプラトニズムとフッサールの形相的直観の理論との類似性を示す(第2部第13章)。

本書に含まれる論考の膨大さを考慮すれ

ば、ここで紹介できたものは余りにも少ない。だが、全体を一瞥して、本書の目的とする「現象学の自然化」というプロジェクトの豊かな可能性については、銘記すべきであると言いたい。フッサールの分析がアクチュアルな認知科学の研究の中で生き生きと蘇える様は、現象学を知るものの知的興奮を掻き立てるに違いない。また、現象学を知らない人にとっても、本書は、心の問題についてこんなアプローチがあったのだ、と知らせてくれる格好の導入となっている。無論、不十分な点もある。一つには、(特に狭義の現象学者の研究において)地に足の着かないものや積極的な提言を欠いたものが目につき、玉石混交の感が否めない。その基準は主として、認知科学の事例研究にどれだけ根差しているか、という点に存すると思われる。もう一つには、現象学的説明と認知科学的説明との接合に、どれだけの説得力があるのか、という疑問が残る。まだ、説明ギャップは架橋された、とは言えないのではないか。だが、緒についたばかりのプロジェクトをこのようなヴォリュームで紹介する本書の試みは画期的である。研究プロジェクトとしての「自然化された現象学」が、上に挙げた困難を克服し、心の問題の解決においてどれだけの成果を挙げることができるのか、今後の展開を見守るべきであろう。